

続 端 己 柔 道
OUTLYING JUDO II

5th degree black belt in Judo
YUSUKE FUCHI

渕 依 介

続「端っこ柔道」 ～五段になって振り返る～

柔道界の端っこで居続けた自分の話にまさか共感いただける方が多くいるとはと全く思っていませんでした。ご興味の沸く部分だけでもお読みください。

目次

■農工大の柔道部	<大学時代>
■都立大の柔道部	<大学時代>
■水産大と商船大	<大学時代>
■東京歯科大学柔道部	<大学時代>
■オーストラリア人と柔道	<大学時代>
■東欧人と柔道	<大学時代>
■アメリカ人と柔道	<20代後半>
■起業したのに柔道	<20代後半>
■親子鷹に出会った	<30代>
■ブラジリアン柔術と柔道	<30代>
■技の選択と集中	<30代>
■達人は其処にいる	<30代・40代>
■交通事故と柔道の受け身	<20代後半>
■交通事故と柔道の関節技	<20代後半>
■合気道と出会った	<大学時代>
■合気道と柔道の達人	<大学時代思索>
■合気道 SA と乱取り論	<20代後半>
■合気道の雰囲気 VS 柔道の雰囲気	<20代後半>
■プロボクサーとの対決	<大学時代>

■農工大の柔道部■

お互い弱小柔道部ではあったが、僕が1年の頃、農工大はさらに弱くて7人の団体戦にたった2人で出場していた。要するに最初から負けているのである。

電通大柔道部の先輩のO寺さんは、農工大の恵まれない状況であっても淡々とやるべきことをやる謙虚な態度を称賛していた。

「弱いとか小さいとかは恥じる事ではない。大っぴらに称賛される事もないが、見ている人は見ているのだな」という事をこの事から学べた。

その後農工大にソウスイ君という学生が現れ主将になって大奮闘。部員を何倍にも増やし、府中刑務所や他大ともガンガン出稽古をしたりしていた。電通大も強くなっていく過程にあったが、農工大の躍進は半端じゃなかった。

東京都国公立大学戦でジュニアという2年生迄の団体戦では何十年ぶりに二強をひっくり返して優勝してしまったのだ。

決勝は代表戦にもつれ込む僅差の戦いで、最後はエース関くんが残り0コンマ何秒で技を決めた。会場は歓声とどよめきで騒然としていた。

僕は頻繁に農工大と出稽古をしていたので、自分の大学の様に非常に嬉しかったのを覚えている。映画のような瞬間だった。

農工大と練習があると、終わってから農工大の部室で酒を飲んでいた。

農工大には口が達者で調子のいい浜谷くんという年下の学生がいてしばしば馬鹿話で盛り上がっていた。髪の毛を赤くして、カラーコンタクトの理系大学柔道部員にあるまじきチャラチャラと恰好をつけていた神田くんとも何故かよく酒宴の卓を囲んでいた。当時の彼の微妙な自慢話にはみんな閉口していた。

この人たちがTHE MANZAI 2012で優勝するハマカーンである。テレビで優勝したのを見たときに、農工大の優勝の思い出と重なって、あの時の熱い血潮が沸き立つ感覚が蘇ってきた。

農工大には他にもキャラの強い女性部員が複数在籍しており、女子の居ない電通大とはまた違った楽しさがあった。

■都立大の柔道部■

もともと都立大の実力は電通大の一枚上手で強い選手が沢山いた。勝ちにこだわる都立大には、ジュニアの団体戦は2年生迄しか出てはいけないのに、留年しているから2年生以下だと言う理屈で何度もジュニアに出てくるM笠君と言う人がいた。

これは都立大が悪いのではなく、彼の個性と主張が強かったのが原因だという事を付け加えておく。でもなぜかM笠君は皆に愛されていた。その後ルールが改正され通算2回迄しか出場できなくなったので、このようなアクの強い事件はこの後発生しない。

ピンク帯を締めて稽古をしているふざけた奴もいた。この人は公園や学内のカップルを覗き見するのが得意でピーピンというあだ名もついていた。もうこうなると本名は出せない。

そして印象深いのが実践柔道と一緒に稽古してくれていたH君とU場君だ。この二人は稽古熱心で且つ好青年であった。特にH君は僕が理論作りしていた打撃と投げ技の融合を体現してくれた非常に優秀な選手でプロ柔道のリングにも上がってくれていた。

この時に強豪国際武道大学出身で総合格闘技黎明時代の猛者、格闘忍者の異名をとる選手を下すという快挙を成し遂げている。

僕が三・四年の頃は都立と電通は実力が伯仲しており、オーダーの差で勝ち負けがつくような状態であったが、情報の壁を作らず頻繁にお互い交流し友情を深めあえたのはその後の人生財産になっている。

■水産大と商船大■

水産大、特に寮生はクセの強い人種の巣窟になっていた。高校の同期のK君が1年先に水産大に進んでいたのも、水産大にはとても多くの仲間ができた。

寮生たちは兎に角よく酒を飲む。水産大は飲酒事故で死人は

出さないと言っていたが、毎年1年生のうち何割かは嫌になって辞めていく状態であったと聞いていた。

水産大の寮では日本酒は水、焼酎は牛乳、水はクスリと呼んでいた。寮と言う独自世界の文化とクセの強さを表す一例であろう。

水産大の寮にはコロボックルが出るとか幽霊が出るとか、学生闘争時代に機動隊から逃れるための手掘りトンネルがある等の伝説が色々あって、大人しい学風の電通大の僕から見たら何やら羨ましかった。

対する商船大にはプロレスが大好きなA山君という学生がいて、僕の企画に非常によく力を貸してくれた。

夏合宿を企画すると南房総富浦にある商船大の合宿施設を手配してくれた。合宿の夜に僕と彼でタッグを組んでプロレス八百長論者と別れてディベートごっこを繰り広げ、論破しまくっていた。

このA山君は頭の回転も速いが、人望のある人で、翌年の淵杯柔道大会では主幹で苦勞してくれ、その後長年続くこの大会の礎を作ってくれた。

商船・水産はお互いに対抗心の強い大学で、部活の対抗戦が毎年行われていた。毎年その話題で寮生たちは盛り上がっていた。

しかしあるとき両大学は合併して東京海洋大学になってしまった。

大人の都合でそんな男臭いバンカラ文化は消え去ってしまった。

■東京歯科大学柔道部■

2段3段と昇進し柔道部主将を終えて電通大を卒業する年に実家の圧力で東京歯科大学を受験する。何故か合格したので不本意ながらまた大学1年生になってしまった。

この大学は良家のご子息がワンサカ集まっていて、タクシーで通学、バーバリーしか身に着けないとか、ハッターリ丸見えの腕自慢をしている様な学生がちょこちょこ存在していた。堅実

が標準の国立大から来た僕には気色悪い刺激の連続であった。

歯科医師である父親の執念に付き合っただけなので、特に学業に面白みを感じる事はなかった。

特段やる事もないので柔道部に入部した。ところがこの部活がやる気なしの先輩だらけであった。圧倒的に僕が強かったのもあってか稽古にもほとんど誰も来ない。後輩に指導してほしいくないプライドもあったのであろう。

仕方ないので隣で稽古している少林寺拳法部の乱取りに参加して、ここでも圧倒的に勝ちまくっていた。

この大学は家族主義を全面に謳っていた事もあるのか、学内での恋愛と卒業後の結婚は盛んであった。ある朝部室に道着を置きにいったら主将の3年生が彼女とチュッチュして部室に入れない事があった。

部活の前に学内で性行為をして来て使用済みの避妊具を股間から外して見せるという悪趣味な事をするホスト風の先輩がいた。臭いが気持ち悪くてトラウマになってしまった。この人も名前が出せない。

しかし何故このようなチャラ男の彼が柔道部だったのかは謎を感じる。この大学ではこのように何故この人がこのような面を持っているのかが不可解な事が多かった。

親族からの過度な期待、落第・国家試験の恐怖、学内に漂う封建的な抑圧から解放されたいと言う集団的心理があったのも、不可解な行動を説明する一因かもしれない。はたまた単に人間の多様性という事なのであろうか。もちろん今では皆さん立派な歯医者さんになっている。

OB 会という柔道部を卒業した大人や老人たちを現役部員が接待する会があった。柔道稽古は一切せず料亭にスーツで集まり特段柔道の話もせずに OB の機嫌を損ねないようにピリピリするという東京歯科大学の重厚な歴史と縦社会を実感できる会であった。

この大学には良い面も沢山あったのであろうが、精神的に付いて行けず1年も経たずに中退してしまった。

祖父がこの大学 OB で当時の血脇学長（野口英世の資金提供

者として有名) の話を父に口伝していたと言う家族史から見れば私の中退は残念極まりない事であった。この中退をきっかけに父が自殺未遂をする。事なきを得たが、この価値観世界の中で歯学部中退はそのくらい無念な事であった。

今思えばそもそも自分の気合不足なのであるが、柔道すら満足にできない暗黒時代であった。

■オーストラリア人と柔道■

学生時代の頃から欧米人と柔道を通じて触れ合う機会をちょくちょく得ていた。

学生時代にオーストラリアから来た重量級で少し柔道ができるトリスタン君が交換留学で電通大に来てその間柔道部に在籍していた。僕は彼の教育係の様なポジションだったので他の部員よりは接点が多かった。

トリスタンの日本語は達者であった。普段から品の悪いジョークを日本語言うので、つまらないことを言う外人キャラで通っていたが、一番困るのが試合の応援であった。

大声で我々チームを応援するのであるが、そのセリフが

「腕を折れー！」

「締め落とせー！」

などと過激なものであった。その場は先輩が制してそのようなセリフを辞めさせるのであるが、彼はルールで認められている技の範囲の応援で何がいけないのかわからないと言っていた。

また試合はあくまで試合であるから実生活と切り離されているべきだという見解も日本人の柔道を応援する感覚とは乖離があった。

この人は普段から下品だったのであるが、双子の兄がいるという事が明るみに出たとき「こんな奴がもう一人いるのかよ～」と何となくグツタリしたのと電通大に 2 人で来なくてくれたのをホッとしたのを覚えている。

■東欧人と柔道■

電通大にいた頃、新入部員で現れた東欧出身のジョルジは体

が小さく力も弱かった。柔道の技は真面目に練習しても出来るようになる迄数年かかる事もある。彼も成長ゆっくりの人であった。彼は僕に敵わないのは技が未熟なのではなく、力が劣るからだと思っていたらしい。半年ほど道場には顔を出さなかった。ところがある日、見違えるようにビルドアップされたジョルジ君が道場に現れた。

柔道着の胸元は筋肉でパンパンになっている。さすがは白人、筋肉の成長するスピードが日本人とは違う。腕を突っ張る力がついたから確かに技には入りづらい。しかしそのような単純な防御は黒帯クラスには通用しない。あっという間に投げられてしまっていた。

単なる力は通用しないという事が分かったようで、半年も努力してきた事が役に立たなかったショックは隠しきれないものがあった。

しかし僕から言えば当然で、道場を半年も休めば周りのみんなは半年分強くなっているに決まっている。対するジョルジ君は力があれば何でもできるという観念があったようで、我々の稽古が理解できず部を去っていった。

■アメリカ人と柔道■

社会人になったころ調布市柔道連盟で稽古をしていた。そこにやたら明るいアメリカ人が来ていた。僕も英語が得意ではないが、ここでも指導役になってしまった。

僕が「柔道では技上手ならば力がある人や大きな人を投げられる」という話をすると彼は「オー！ニンジャ～！」と言って喜んでいて。柔道や空手を忍者と同列だと思っている外国人は案外多いようだ。

そんな軽ーいノリの彼には美人の日本人の彼女がいて、稽古する度に彼を送迎していた。

僕が「あの女性はあなたの恋人ですか？」と訊くと

Just a girl friend ! (ただの女友達サ！)

But Maybe she is serious (でも多分彼女は真剣なんだよね～)

とアメリカ人特有のポーズとしかめ眉で答えていた。ビバリー

ヒルズのドラマは本当なのだと思います。

調布柔連の大人たちは同胞の日本人女子が弄ばれている事を苦々しく思っていた。

しかしながらちょっと間違った認識はあるにせよ柔道熱心であった彼を誰しも何となく憎めなかった。

ある日、迎えに来る彼女を見て「大和撫子！シッカリしてくれよ！」と内心思ったが詮無い事であった。

■起業したのに柔道■

東京歯科大学を中退し、電通大の教授の推薦で就職したら超ブラック企業！サービス残業は毎月 140 時間以上。ほぼずっと会社に泊まっていた。2 か月で退社。これはこれでいい勉強になった。

自分は勤め人には向かないと判断し、西暦 2000 年にリング&イベント会社を起業した。

2002 年頃から小平に戸建てを安く借りており、そこが拠点で変わり者が集まっていた。

世の中不景気であったし、若造が突然始めた会社と取引してくれる所も僅かで仕事は暇だった。結局電通大の柔道場に毎週数年通いつづけた。

外語大柔道部でテコンドーも得意にしていた Y 村君という鼻つまみ者がうちに居候していた時期もあった。

彼のボディビル選手権の形態模写は絶品で、今思い出しても噴き出すほどの爆笑ネタであった。一生涯で最も笑った日の一つになっている。

また電通大の後輩で綺麗な体落しが得意な M 下君と言う謙虚な男子が僕の家に住んでいた事があった。吉村君は松下君にしつこいイタズラを繰り返していた。天罰が下り吉村君の持病の腰痛が悪化。牛窓の実家に帰ってくれたので、こちらとしては事なきを得た。数か月してご両親から「息子はニートになって聞かん坊を繰り返している。瀏さんから叱ってくれ。」との愛ある知らせを頂けた。(この人も数年後には社会復帰&結婚したのでご安心あれ。)

このように金銭に縁がない状態ではあったが柔道とその仲間のお陰で腐る事もなく、生活できる程度の仕事をこなしながら、心豊かで健康な日々を送りつつ飛躍のチャンスが来る日を待っていた。

■親子鷹に出会った■

僕が四街道に住んでいた頃、まだヨチヨチ歩きの長女を連れて四街道中央公園の柔道場に稽古に行くと、大きな先生が小学校高学年男子に繰り返し体罰与えて大声で叱りつけているのを目にした。男の子は大泣きで。稽古に来ている周囲も冷ややかにそれを見守っていた。

この先生は同世代に見えたが、身長 180 cm超の僕よりもさらに 1 周り大きかった。さらに体の鍛え方の出来が全く違う。周囲の人に訊けば下志津駐屯地の自衛官らしく、息子に柔道を教えているとの事だった。

以前から見かけていたが、見た目が怖い、坊主頭で眉毛も薄いので近寄らないようにしていた。

しかしながら、この親子以外は、厳しい仕事が終わって、やっと夕方の時間を作って市民道場に来て、わずかながらの柔道タイムを楽しもうと言う人が殆どである。

僕は勇気を振り絞って彼に言った。

「道場は市民皆の場所ですから、怒鳴って指導するのはご自宅でなさってください。雰囲気が悪くなりますから。」

すると彼は僕をにらみ、さらに詰め寄ってきた。このころには殆どの相手に雰囲気負けする事はなかったが、この瞬間は正直怖かった。

流石に自衛官が暴力で国民を痛めつけてはならないからか、寸前で思いとどまってくれ、その時は事なきを得た。

その約 5 年後、この時泣いていた少年は高校生で日本一になっていた。その後更に日本を代表する選手となって国際大会でも活躍している。それは素晴らしい事である。千葉県柔道界の誉れである。しかし僕は心の中で称賛以外のモヤモヤを感じた。

勝ちに拘るだけと言うのは、柔道で学べるそれ以外の何かを捨ててしまうのではないかと言う疑念を感じてしまう出来事だった。

人それぞれに道があり、それも全て柔の道ではあるのだが。

■ブラジリアン柔術と柔道■

ブラジリアン柔術とは明治時代に伝播した初期柔道がそのままブラジルで発達した寝技中心の武術である。

30代になっていた僕は稽古のほとんどをこの柔術愛好家の方と行うようになっていた。社会人中心の競技で学生柔道にありがちな殺伐感がなく、何処の道場も縦社会感が少なく雰囲気は柔和なのが特徴だ。

柔道出身者も多数いる。気兼ねなく寝技の稽古ができる。ブラジリアン柔術はかつて格闘技最強を前面に押し出していた時期とは違い、むしろ社会人が安全に楽しめる格闘技と言うような位置づけになって来た頃であった。

このようなマーケティングの発想転換は柔道界にはないので見習いたい所でもある。

親が柔術を始めた事が切っ掛けで子供たちが柔道を始めるという副産物もあり、柔道側にとっては有難い話にもなっている。

■技の選択と集中■

学生時代に海外柔術や総合格闘技はとても新鮮で沢山の技を習得しようと精力的に稽古をしていた。しかし社会人になって仕事が忙しくなってくると稽古不足で柔道の技ですらバリエーションを減らしていた。こうなってくると自身が身に付ける新技を増やしていく事に疑問を感じるようになっていた。

技の展開には大きく二つの戦略がある。一つは将棋的戦略だ。ある技を覚えたら、その封じ手を覚える。しかしその封じ手もまた破り技があるのだ。

もう一つは必殺技を磨くやり方だ。必殺技を出す、相手はこれを封じようとする。でもその封じ手を技の力で突き破る。男らしい戦術だ。僕らが高校時代に憧れた「吉田の内股！古賀の

背負い投げ！」などが此れにあたる。

自分がやってきた柔道を証明したいという気持ちもあるし、子供たちに一つでも技を残したいと思うようになっていたこともあり、学生時代迄にやってきた柔道を基本に稽古していくことにした。技が相手にバレていてもそれを突き破って掛かるように技を磨き、その技術論理を解析し後進に伝えたいと考えるようになった。

それから10年、現在では基本的な技を繰り返し稽古するようになっていく。あれほど熱心に総合格闘技の研究をし、多彩なテクニックを勉強していたにも関わらず、受け身、礼儀作法、そして先人から受け継がれた形（かた）の重要性に不思議と気持ちが向いてくるのだ。

■達人は其処にいる■

○賀は九州大学柔道部出身、ブラジリアン柔術で日本人初の世界王者になった人で、僕の愛する電通大のある調布に道場を出している。

30代になって四街道に住み移り、盲学校の柔道場を借りている格闘技のサークルに入ると、偶然にもその○賀先生の門弟の方が主宰のサークルであった。

少なからずご縁があったので、○賀先生ご自身に一度稽古をつけてもらった。スピードと技の精度が高く全く歯が立たなかった。

僕も寝技には自信があったので、少しは食い下がれるかと思っていたが、ここまで差があるとは思っていなかった。

技術的な事も然ることながら、稽古十分の動きのキレがただ事ではなかった。年上であるにもかかわらず稽古熱心な大賀先生には頭が下がる。

子どもたちが通う紅柔道少年団にいるY岡先生は国際武道大学出身、日本ベテランズ国際柔道大会で優勝しているエリート柔道家である。

元々とんでもない差があるので、勝てないのは当然なのであるが、軽く組まれていても何時の間にか崩されていて、来るぞ

来るぞと分かっている技の入りののだが、必ずかかって豪快に投げられてしまう。技の天才と呼べる人だ。

その魔法のような崩しの極意を訪ねたが、言葉で人に伝えるのは難しいとの事だった。合気道の様にも感じるこの技は魔法ではない。武道の理想を体現化してしまっているのだ。そんな達人級の人が町道場にだってウジャウジャいるのが柔道なのだ。恐ろしくも頼もしい日本の宝である。

■交通事故と柔道の受け身■

オートバイでの交通事故に 2 度遭って、その都度受け身のお陰で助かっている。特に危なかったのは 2 回目の事故であった。

多摩地区は南北の交通手段アクセスが悪く、時間通りに移動する手段としてオートバイに乗っていた。

青梅街道田無付近で信号待ちをしていた。ASAHI のソフトドリンクを自動販売機に配って回る 2 トンアルミトラックの左側に停車していた。

信号が青になったがギア操作の遅れで出遅れた。先に出たトラックの左側面をそのまま 10m 程度進んだところで突然幅寄せを食らった。

あとからウインカーを出したので、曲がるべきところを忘れていたのだと思う。

オートバイは不安定な乗り物でちょっと当たっただけで制御不能になる。この瞬間は死ぬかもしれないと思った。

運転手が接触の音に気づいてトラックは止まった。トラックと左側の街路樹との隙間を通過して僕の体は投げ出された。おそらく時速 10 キロ前後での事故だったが、信じられないくらい高く遠く飛ぶ。

空中に上がると不思議な事に、異常なほど頭の回転が速くなり、落ちるまでのゼロコンマ何秒の間に、現況で選択し得る最も安全な地点に前回り受け身で着地する態勢を整える事が出来たのだ。普段から乱取りなどで投げられる時に受け身を取るのか堪えるのか等を瞬時に考える癖があったからであろう。

トラックの屋根ぐらゐの高さから勢い付けてアスファルトに

落っこちる訳なので無傷ではなかったが生き残った。おそらく受け身のできない人が打ちどころを間違えれば死亡事故であったと思う。

■交通事故と柔道の関節技■

赤いタンクが綺麗な 250 cc のバイクが全損の大事故。その続きの話。

僕は青梅街道に投げ出されて倒れていた。青い顔した若い運転手がトラックから降りてあたふたしているのが見えた。会社に「ど・ど・どうすればいいですか・・・？」と携帯電話で話しているようだ。

しかしこちらも慌てる運転手に同情する余裕はない。左腕に激痛が走っていた。見れば腕が不自然な形に曲がっている。その形を見て、肩を脱臼または亜脱臼していることが分かった。関節技の知識である。

肘・肩の脱臼の整復や締め落ちた人の蘇生などの救急的な処置は柔道の先生に教わっていた。また関節技の勉強で解剖の知識もあったので、今回は腕を正常な位置に戻せば治るのではないかと考えた。通常の人であれば痛くて動けない状態だろう。しかし柔道の稽古と数々の怪我の経験から、僕はこの手に痛みには耐性がついていた。気合と根性で痛みをこらえて腕を正常な位置に引き寄せると「カック」と肩自身の筋力で骨が収まったのが分かった。

脱臼はハマると嘘のように痛みがなくなる。救急車が到着する頃には至極軽傷の被害者になっていた。柔道のお陰で僕と運転手と保険会社は大いに助かったのだった。

■合気道と出会った■

合気道の技はとてつもなく高度である。

学生時代に家庭教師事務所を経営していた。客先は中高生の受験指導ばかりではなかった。電通大の友達をパソコン講座の家庭教師として60代男性の担任をしてもらっていたことがあった。偶然この人が合気道の名人塩田剛三の直弟子の人で合気

道師範であった。

合気道はダンスの延長でインチキなものだと思っていたが、この合気道師範の話は大変興味深かった。この師範の人柄もよい話が上手なので、聞きほれていた。これぞ合気の一部と言える。

一通り話を聞くと僕の見解には誤解があるらしいと分かった。早速道場にお邪魔する事にした。そこで基礎的な稽古に参加させていただき、いくつかの技を掛けてもらい。熟練者稽古の見取りをさせて頂いた。

この時の観察と柔道の経験を元に考え、合気道の投げ技は3つに種別できると感じた。

1つ目は柔道でも稽古をするような一般的力学での投げ技、入り身投げなどが此れに相当する。

2つ目は関節を決めて投げる、小手返しなどが此れに相当する。

3つ目が本道、合気である。これは相手の気をこちらに合わせることで崩し、そのまま投げるものである。非常に高度な概念であるが確実に理にかなったものでもある。

■合気道と柔道の達人■

合気は柔道でも感じることもある。柔道でも達人は力や派手なスピードを駆使する事なく、いつの間にか相手を崩している。自ら崩れていくのが分かる。これは非常に繊細な技であり高度なものだ。

稽古を積んだお陰なのか、僕は三段になった頃からこの微妙な崩しを体で感じられるようになった。感知したとて、勿論そのまま投げられてしまう。こちらが体得しようなどと努々思えるものではない。

合気道の塩田剛三師範は小柄ながら元々柔道の達人であった。彼が合気道に入門する前からこの繊細な崩しを会得していたと僕は推察している。

塩田名人は合気道に出会い柔道との違いを実感しつつも、自身のもつ繊細な感覚を磨き続け養神館の合気道を完成させたのではないだろうか。

僕は合気道こそ天才が更なる高みを目指さず事ができる道だ
と思う。塩田名人亡き現代、柔道達人が合気道を学び、失われ
た応用合気の体現者になってほしい。ちなみに僕にはそのよう
な高度な才能はない。

合気道の技術および修行法は体系化されている。従って一般
人が合気道を稽古しても安全効果に一定の意味はあると思う。

しかし同時に思うのは、身の安全の補強ならば上達するため
に最も才能を必要としない武道は柔道だと。

■合気道 SA と乱取り論■

乱取りとは形稽古と違って自由に技を掛けあう稽古を指す。
柔道でいえば試合形式の稽古と思えばわかりやすい。

柔道の始祖嘉納師範の言葉に「乱取りには負ける覚悟が必要
だ」がある。この言葉から二つの意味を僕なりに感じている。

一つ目は勝ち負けだけに拘らず技を習得錬磨すること。二つ
目は真剣にやって負けたときのくやしさと謙虚さ知る機会であ
る。

従来合気道を何年か形で稽古し、技の合理性を知った浅学な
学生合気道部員はその技が実戦で応用できると思い込み、俺は
強いなどと言い始めてしまう麻疹のような病気にかかる事があ
る。

このような半端な武道書生はしばしば頭デッカチな理論を振
りかざす。結果として自らの道の評判を下げている。

合気道 SA とは通常形稽古のみで技を練り上げる従来合気道
と違い、乱取り稽古を取り入れた実戦向けの合気道である。

合気道 SA を稽古する人で前出のような慢心を持った人には
出会っていない。乱取りの効能であろう。そして更に嬉しい事
に形稽古合気道では滅多にいない骨太な選手に多数出会える。

学生時代に合気道 SA の大会優勝者が電通大の道場に来訪し
てくれた。この日に合気道と柔道の他流乱取りを行った。

この人、体格がデカイ！見るからに強そうであった。

デカイだけで稽古を積んだ柔道技を受けられるわけではない。
この合気道家は我々柔道部の技を受けたり流したり互角に戦え

るのである。小手返しなどで逆に投げられてしまう柔道部員もいた。

この合気道の猛者に難度の高い合気技を乱取りで使える人はいるのか聞いてみた。「塩田先生が最後だと思います」との回答であった。

やはり実戦合気の体現は失われてしまったのだろうか？同じ日本武道として一抹の寂しさを感じていた。

■合気道の雰囲気VS柔道の雰囲気■

柔道部と合気道部には決定的な違いがあった。

合気道は女子が多かったのだ。

合気道女子の袴と道着がカワイイ。この姿にあこがれて入部する女子も多いと聞く。当時の大学では合気道とラクロスは体育会であるにも関わらず男女仲良く練習しているモテモテ部活のイメージだった。

ある日、僕は都内国公立絶対王者學藝大柔道部に出稽古に行った。

強面の柔道部主将が「時間だ！早く道場から出よう」と言い出した。

柔道場建物内にある柔道部室に避難するように入るやいやな、袴姿も美しい女学生たちが柔道部の5倍くらいの大人数で道場に押し寄せてきた。

つい先程まで、むせ返る男の汗と熱気でみなぎっていた道場はそよ風が吹くお花畑に変わってしまった。

僕らは部室で静かに着替え、筋骨隆々柔道部員たちと一緒に花園の脇を小さくなって道場をあとにした。うーん。合気道部強し。

今では女子柔道部員が日本中どこに行っても珍しくないほどに増えている。うちの娘は2人とも柔道をしているが女子の稽古相手に困ることはない。

しかし当時の合気道女子が持つお花畑感を出す柔道女子はまだ見たことがない。多分今後もない。それが柔道。この後も僕は汗と熱気の柔道部を続けていく。

■プロボクサーとの対決■

新人王トーナメントを勝ちっぱなしで引退したプロボクサーとの交流のお話。

電通大の1年の頃金井さんと言うシーリング職人さんと電通大の柔道場で出会った。

学生時代を通じて僕のことを大変かわいがってくれた。

貧乏学生の僕に日当の良いアルバイトを何度もやらせてくれた。

何故これ程かわいがってくれたかを以下に説明する。

金井さんとは乱取り稽古をよくやっていた。顔面無しの打撃を加えたルールでは柔道技が有利で僕が彼を投げていた。

あるとき丁度良い顔面用の防具が手に入ったので、その日は顔面掌底有りのルールでやっていた。

手による顔面打撃のアリナシは大いに間合いが変わってくる。

先に組めれば柔道の勝ち。入り際の組まれる前に打撃で決めきればボクシングの勝ちだ。

最初はうまく組みついて投げ切ったが、二本目の組み際にフック気味の掌底が僕の横顎に入った。一発KO！この日の稽古はお仕舞！気持ちいい程に見事な技だった。

後日、金井さんは僕を自宅に招いてくれて奥様の手料理で歓待してくれた。

その時にあの掌底について聞いてみた。金井さんが答えた。

「ボクシング時代を含めて一番の手ごたえだった」とそのまま続けて「でもそれまでは瀏君に何度もつかまって投げられる夢を毎晩のように見ている」と言った。

お互いが相手の強さを認めていたと言う事だ。その後長野県に帰った金井さんとは20年経った今も連絡を取り合っている。友情に似た信頼が彼との仲にはある。

◎多くの方に反響を頂き、続編ができました。このような拙い文章を飽きずに読んでいただいた一人ひとりに感謝を申し上げます。

2018年8月2日 43歳誕生日 瀏 佑介